

# こんにち に いにしえ ぞうお 今日いまだ煮えたぎる 古の憎悪

ガーナー・テッド・アームストロング著

イスラエルとアメリカに対する、イスラム教アラブ人の心の中で煮えたぎる憎しみは政治的なものでも、近年芽生えたものでもありません。それは何世紀にもわたり衝突し、戦い、傷を舐め、また戦争に明け暮れてきた何世代もの家系から受け継がれた古の憎悪なのです。キリスト誕生から6世紀後に偽りであるイスラム教が誕生し、アラブ中に広がり始めた時よりも、ずっと以前から存在するものなのです。

今日、爆撃、虐殺、殺人が起こるたびに、イスラエルと中東諸国の戦闘員の間にやりきれない怒りや衝動的な憤怒、そして憎しみを引き起こしています。これは長年の時を経て、双方とも本来の争いの原因を忘れてしまったからなのです。そのため、イスラエルがテロリストを殺害したり、テロリストが自爆テロにより自らとその被害者達を粉々に吹き飛ばしたりする度に、更に暴力的な復讐の誓いへと昇華してしまうのです！

アラブ人がイスラエル人を攻撃し、イスラエル人は反撃して、アラブ人達を殺害または拘束します。責任者達の住居は破壊され、アラブ人がまた復讐を誓います。この終わり無き暴力の連鎖の本質は政治的なものではなく、実際には、宗教的および民族的なものなのです！こうして継続されていく殺気に満ちた怒りの奥深さを理解するためには、中東の民族や宗教の起源を理解しなければなりません。

アラブ人は自ら、ハガルとアブラハムの間に生まれたイシュマエルという男児の子孫である事を認知しています。エジプト人であったハガルは、アブラハムの妻サライ（別名：サラ）の召使いでした。しかし、サライはハガルに嫉妬し、彼女とその生まれたばかりの息子”イシュマエル”を追放したのです。実際、アラブ人の間でよく使われる名は、アブラハムに由来する「イブラヒム」、そしてイシュマエルに由来する「イスマイル」があります。イシュマエルに関して大変印象深い予言があります。「彼は多くの国家の父となるだろう。」「彼は砂漠の猛者となるだろう。」そして、

かれ どうほう 彼は同胞である「イサク（後にアブラハムに産まれた嫡出子）やその息子ヤコブ（後のイスラエル）、及び彼の末裔となる12の部族に対して常に共在（あるいは共存）し、イシュマエルとイスラエル、及び彼の子孫との間に絶えることのない問題があり続けるだろう。」と、供述されているのは興味深い事柄です。このアブラハムの二人の息子の間に始まった古の嫉妬と競争心を知ることによってのみ、今日の何百万ものアラブ人の心の中に煮えたぎる憎しみを、本当に理解することが出来るのです。

この事は創世記16章に記されています。「さて、アブラムの妻サライには子供が  
できなかつたが、彼女にはエジプト人のハガルという召使いがいた。（注：ヘブライ語でハガルは『逃走』という意味です”）。

“そして、サライはアブラムに言った。『お聞き下さい。主は私に子供をお授け  
になりません。ですから、どうか私の召使をお娶り下さい。そうする事によって、  
私は彼女を通じて子供を持てるかもしれません。』そして、アブラムはサライの言葉を聞き入れた。

“アブラムの妻サライはそのエジプト人の召使いであるハガルを夫のアブラムに  
彼女を妻として与えた。これは、アブラムがカナンの地で10年を過ごした後の事だ  
った。

“こうして彼はハガルの元へ行き、ハガルは身ごもった。彼女は自分が身ごもつ  
たのを知った時、その女主人を卑下の目で見えるようになった。

“サライはアブラムに言った。『私が受けた侮辱はあなたのせいです。私があ  
なたにあの召使いを抱かせてあげたのに、彼女は自分が身ごもったと知ってから、私  
を卑下するようになりました。主が私と貴方の間を裁かれますように。

“しかし、アブラムはサライに言った、まあ聞きなさい。お前の召使いはお前のも  
のである。お前の好きなようにすればいい。そして、サライが彼女を厳しく取り扱っ  
たので、彼女はサライの目の前から逃走した”（創世記16：1－6）

これは明らかに、ハガルが単なる奴隷以上の身分だったことが示唆しています。  
召使いと女主人という関係を保ちながらも、彼女とサライは親しく、内心の友であっ

たのかもしれませんが。ハガルがその事に同意していた事を見ると、彼女が強姦の被害者 - 神の法とは異なる人間の聖書解釈 - としてではなく、二人で共にこれを企て、世界初の代理母例を生み出した事は正に明らかです。

サライの受けた屈辱は、現代の女性には理解し難いものです。その当時、妻が不妊である事は恥ずべきことでした。彼女の夫は興味を示さなかったのか。彼は勃起不全だったのか。彼女は本当に妊娠出来なかったのか。それとも、夫を拒んだのか。避妊の妻は、このような噂や疑惑に必ず蔑まれるのが常でした。妻の究極的な目的はその夫に子供を授ける事にあり、その子孫の母となり、血統の受け継ぎを保ち、家名を消滅させない為でした。その当時、女性が仕事を持ったり、政治に関与するという事は、考えられない事だったのです。

さて、サライの迫害のせいでその姿を消したハガルに、その後何が起こったのか見てみましょう。「主の天使は荒野の泉のほとり、すなわちシュルへ向かう道にある泉のほとりで、彼女を見つけた。

“そして主の天使は言った、サライの召使いハガルよ、お前はどこから来たのですか？そして、どこへ行くのですか？ 彼女は言った、私は女主人のサライに見つからぬよう逃げているのです。

“そして主の天使（ヘブライ語で「使い」の意）は彼女に言った、お前は女主人のもとに戻り、その手に身を委ねなさい。

“主の天使は彼女に言った。『私がお前の子孫を増やします。その数は数え切れぬ程となるでしょう。

“さらに主の天使は彼女に言った、よく聞きなさい、お前は今身ごもっています、そして男児を産みます、さればその子をイシュマエルと名付けなさい；（注：「イシュマエル」は”神は聞いたもう“の意）。これは主がお前の苦難をお聞き届けになられたからです。

“そして彼は猛者となり（文字通り、「猛者」とは砂漠の猛者であり、強健で独立的、かつ孤高で御される事の無いという、彼とその子孫の特徴を表現したものです。この呼称は決して、野蛮人、あるいは、それに似た意味を示しているのではな

く、自然の荒々しい不毛の地で生き残れる者という意味を持っています。) 、その手は全ての人に立ち向かい、また全ての手は彼と対立し、彼は全ての兄弟と [対面した形で] 共存する事となるでしょう (創世記16 : 7-12) 。

これらの予言の示唆するところは、今日のベドウィン族アラブ人達に最も濃厚に表れています。ジャマイソン氏 (Jamaisson) ・フォーセット氏 (Faucett) ・ブラウン氏 (Brown) 共著である『The Critical and Experimental Commentary (批評的かつ試験的な解説書)』には、「彼は全ての兄弟と共存する事となるだろう。」と記述され、彼がたとえ兄弟と共存していても、その個性的な敵対心を保つと書かれています。それからまた他にも地理的な解釈をするならば、“東へー東方へ”には、彼は、特にアラビアで、全ての兄弟と共存する事となるだろう。』(第1巻150ページ)と書かれています。

この予言は現実のものになりました。アラブ人の人口が最も集中しているのは、彼らが常に永住している中東です。アブラハムの甥ロトと彼の二人の娘との間の近親相姦関係によって産まれた、二人の非嫡出子エドムとモアブは、“静かに安住し”彼らの古からの地に留まると予言されています。彼らは今日その地で暮らしています。

イシュマエルは、まさしく予言通りにアラバ (または砂漠) で暮らしました。アブラハムが死去された時、イシュマエルはイサクと他の子孫達と共にその傍らにいました。“そして、アブラハムは再び妻を迎えた。その名をケチュラといった。

“そして彼女は、彼にジムラン、ヨクシャン、メダン、ミディアン [モーゼスの妻はミディアン人、すなわち、アブラハムの子孫にあたります。]、イシュバク、さらにシュアを産み与えた。

“そしてヨクシャンはシュバとデダンを産んだ。デダンの息子達はアシュル人、レトシム人、レウミム人であった。

“それからミディアンの息子達であるエファ、エフェル (原語発音 : アイファ) 、ハノク、アビダ、エルダアは、皆全てケトラの子孫にあった。”

“そしてアブラハムは彼の富を全てイサクに与えた。

“しかしアブラハムは彼と妾達の間にできた子供達には、贈り物を与え、まだ自分が生きている内に、東方の地へ、東の国へと追いやり、彼の息子イサクから遠ざけた。(創世記25：1－6)当然この行いは、それら全ての息子と孫達19名の胸の内に鋭い嫉妬心を引き起こし、彼らは次のように思ったに違いありません。「イサク同様、アブラハムは我等の父である；それなのになぜ我等はイサクより劣った扱いを受けなければならないのだ？ “自分が「長男」である事を知っており、その為イサクを嫌悪していたイシュマエルは、特に腹を立てていたことでしょう。

事態はアブラハムの死と共にさらに発展していきました。「なお、これらがアブラハムの百七十五年にわたる生涯の主要な日々の出来事だった。

“そしてアブラハムは老人として長寿を全うし、その魂を開放し [「息を引き取り」、または、人生を終え] た。こうして、彼は彼の民 (先祖・家族) の元へ還っていった。

“そして彼の息子イサクとイシュマエルは、マムレに面した、ヒッタイト人ゾハルの息子エフロンの土地にあるマクペラという洞窟に彼を埋葬した。

“その土地はアブラハムがヘテの子孫から買い取った土地であり、アブラハムとその妻サラはそこに埋葬された。

“そしてアブラハムの死後、主はその息子イサクを祝福し、イサクはラハイロイの井戸の側で暮らした。(注：これは、ハガルとまだ幼児だったイシュマエルを救った井戸と同じものです。その名は「幻視の生命の井戸」、または「主を謁見後の命の井戸」を意味しています。) これも、イシュマエルの深い嫌悪感の一因だったのかもしれません。なぜなら、イシュマエルは主が自分と母の命をお救いになられたその荒野のオアシスを、奇跡の地と見なしていたに違いないからです。

“なお、サラのエジプト人の召使いハガルが、アブラハムに産み与えたイシュマエルの系図は次のとおりである。

“また、イシュマエルの子孫の名を世代順に挙げると、長男のネバヨトに始まり、ケダル、アドベエル、ミブサムとなり、

“そしてミシュマ、ドマ、そしてマッサ、

“ハダル、テマ、エトル、ナフィシュ、そしてケデマである。

“これらがイシュマエルの子孫であり、十二人の王子として、それぞれの国の町や居城にも反映された彼らの名前です。（注：ケダルと他のイシュマエルの子孫達は、2000年の歴史を持つ大都市ティレ「原語発音：タイアー」と貿易を交わしたと伝えられている。）（創世記25：7－16）

エゼキエルの予言によると、“デダンは鞍に使う高級な生地を、あなたと取引した。

“アラビアとケダルの全ての王子達はあなたの顧客であり、子羊、雄羊、山羊を用いて、あなたと交易した。

“シバとラアマの商人はあなたの顧客であり、あなたと最高級の香料と高価な宝石と金で取引を行った。」（エゼキエル書27：20－22）

ダビデは「ケダルのテントの中で」一時匿われていた事があると語っており、その場所を遊牧民の住む東方の地と述べています。（詩編120：1－7には、次のように書かれています。「苦難に苛まれる中、私は主に救済を求めた。（彼はイシュマエルの民の間で暮らしていました。）すると、主はそれをお聞き入れになった。

“主よ、どうか私を[ケダルのイシュマエル人の]偽りのくちびると欺きの舌からお救い下さい。

“偽りの舌よ、お前をどうしてやろうか。いったい何を与えてやろう？

“お前は、強者の鋭い矢で射抜かれ、燃え盛るヒノキの木炭で焼かれるといい。

“メセクでの滞在、ケダルのテントの中の暮らしは、私にとって不幸そのものだ！

“私は長い間、平和を憎む者達と暮らしてきた。

“私は平和を好む、しかし私が発言する度に、彼らは争おうとする。”これは、全世界が今日のイスラエルとアラブ間に見いだそうとする“中東和平プロセス”の葛藤

そのものの様に見受けられます。

イシュマエルはかなりの高年齢で亡くなりました。「そしてこれが、イシュマエルの百三十七年にわたる人生だった。こうして、イシュマエルはその魂を開放し[息を引き取り]、彼の民(先祖・家族)の元へ還っていった。

“そしてイシュマエルの子孫は、エジプトからアッシリアの方角に位置する、ハヴイラからシュルにかけての地域に居住した。こうしてイシュマエルは、彼の親戚すべてに見守られて亡くなった。[この広大な地域は、シナイとガザ・ストリップから今日のイラクとクルジスタンに横たわっています]。”

詩編83章の予言の詳細に注目し、それが今日のイスラエルとイシュマエル人達、そして、その同盟国との関係にどのように反映しているかに気をつけてみて下さい。“神よ、黙する事なかれ。神よ、静寂や不動を保つこと無かれ。

“ご覧下さい。あなたの敵は騒動を起こし、あなたを嫌う者達が頭角を現しております。

“彼らはあなたの民に対して奇策を張り巡らし、あなたの大切な人達に対して陰謀を企てております。

“彼らは言います、『さあ、彼らの国そのものを滅してやろう。誰の記憶にもイスラエルという名が残らぬように。』(これこそが全てのイスラム教徒の目標であります!これは、イスラエルの国を文字通りに抹消したがつている、PLOと多くのテロリスト団体が書き記した目的そのものです!)

“彼らは一致団結で画策し、あなたと敵対する同盟を結んでいます。(ユダヤ人に対する継続的な苦悶についての対処法を話し合うために、イスラム国家間で幾つもの「首脳会談」が開かれてきました。);

“エドムのテントの住人、イシュマエル人、モアブ人、そしてハガル人”ハガル“の名によって、これらの人々がイシュマエルの子孫であることを示している事にご注目下さい];

“ゲバル、アモン、アマレク、そして、ペルステ人[現代の”パレスチナ人”]とティレの原住民;

“アッシュールも加わり、彼らはロトの子孫を助けた。セラ」(詩編83:1-8)。アッシュールは現代の「ドイツ」です!「アモン人」は、ロトと彼の娘達との近親相姦による子共、モアブとアモンの子孫でした。アモンは自らの名をとって、ヨルダンの現代の首都を”アマン”と名付けました。

さてここで、中東の人々に対する予言と、彼らの最終的な運命に注目して下さい。特にヨルダンに住むアラブ人を含めた、中東の幾つかの国のハシミテ王朝由来の民について、神はこう仰せられます。”人の子よ、アモン人に対面し、彼らに対して宣告するがよい;

“アモン人にこう伝えるがよい。『主なる神の言葉を聞きなさい。主なる神はこう仰せられます。お前は私の聖地が汚され、イスラエルの地が荒廃し、ユダの家の者達が捕われの身となった時、それをよしと嘲笑った;

“よく聞くがよい、それ故に私はお前を東の民に所有物として授けることにした、彼らはお前の土地に陣営を張り、住居を構え、お前の果物や乳を飲食するであろう。[ダニエル書11:40-45と比較して下さい]。

“私はラバをらくだの家畜小屋とし、アモン人の居所を羊の休息場としよう。そして、お前は、私が主であると思い知るのだ。

“主なる神はこう仰せになります;お前はイスラエルに対する悪意に心躍らせ、手を叩き足を踏み鳴らした;

“よく聞くがよい、それゆえ私はお前の頭上に手を伸ばし、他の国々が好きなだけ強奪できるようお前を引き渡す、そしてお前を人々から分け隔て、それらの国からお前を抹殺しよう:そして、お前は私が主であると思い知るのだ;(エゼキエル書25:1-7)。

ヨルダン、イラク、又はサウジアラビアの誰一人として、エロヒムが神だと知っている者がいるかは疑わしく、彼らの“神”は偽りの定義でとんでもない虚構です。”そして彼らは私が”永遠の”[イスラエルと誓約関係にあるヤハウエまたはエホバ



だ<sup>し</sup>と知るだろう]”という表<sup>ひょうげん</sup>現は、エゼキエルの<sup>よげん</sup>予言に頻<sup>ひんぱん</sup>繁に記<sup>きじゆつ</sup>述されてります。イスラム教<sup>きょう</sup>アラブ人<sup>じんたち</sup>達は、イエス・キリストという人<sup>ひと</sup>の姿<sup>すがた</sup>を借<sup>か</sup>りたのが、ハガルとイシユマエルを救<sup>すく</sup>った神<sup>かみ</sup>と同一<sup>どういつ</sup>の存在<sup>そんざい</sup>だということを知<sup>し</sup>りません！

ヨハネの福音書<sup>ふくいんしょ</sup>」第一章<sup>だいいっしょう</sup>とヘブル人<sup>じん</sup>への手紙<sup>てがみだいいっしょう</sup>第一章<sup>み</sup>に見<sup>めい</sup>られる明<sup>めい</sup>白<sup>はく</sup>な記<sup>きじゆつ</sup>述<sup>まな</sup>を学<sup>まな</sup>ぶ事<sup>こと</sup>により、誰<sup>だれ</sup>もがこの大<sup>たい</sup>切<sup>せつ</sup>な真<sup>しん</sup>理<sup>り</sup>を理<sup>り</sup>解<sup>かい</sup>出<sup>で</sup>来るはず<sup>でき</sup>です。

さて、ここでモアブ、セイル〔ヨルダンとトルコ<sup>ひがし</sup>の東<sup>い</sup>にある岩<sup>いわ</sup>山<sup>やま</sup>と溪<sup>けい</sup>谷<sup>こく</sup>地<sup>ち</sup>帯<sup>たい</sup>〕<sup>い</sup>そしてエドムに関する<sup>かん</sup>予<sup>よ</sup>言<sup>げん</sup>に注<sup>ちゆう</sup>目<sup>もく</sup>して下<sup>くだ</sup>さい。「主<sup>しゆ</sup>なる神<sup>かみ</sup>は仰<sup>おほ</sup>せられる。モアブとセイルが、ユダ<sup>いちぞく</sup>の一族<sup>いっぞく</sup>は他<sup>ほか</sup>の国<sup>くに</sup>の者<sup>もの</sup>達<sup>たち</sup>と同<sup>どう</sup>様<sup>よう</sup>だと言<sup>い</sup>ったので;

“故<sup>ゆえ</sup>に、見<sup>み</sup>よ、私<sup>わたし</sup>はモアブの国<sup>こっきょう</sup>境<sup>い</sup>に位<sup>も</sup>置<sup>と</sup>する最<sup>と</sup>も栄<sup>さか</sup>えた都<sup>とし</sup>市<sup>し</sup>ベテエシモテ、バアルメオン、キリアタイムを<sup>てはじ</sup>手<sup>て</sup>始<sup>はじめ</sup>めに、モアブの横<sup>よこ</sup>腹<sup>ばら</sup>を露<sup>ろ</sup>出<sup>しゆつ</sup>させ、

“彼<sup>かれ</sup>ら<sup>じん</sup>をアモン人<sup>じん</sup>諸<sup>そんざい</sup>共<sup>こと</sup>、東<sup>とう</sup>方<sup>ほう</sup>の人<sup>ひと</sup>々<sup>びと</sup>に所<sup>しよ</sup>有<sup>ゆう</sup>物<sup>ぶつ</sup>として引<sup>ひ</sup>き渡<sup>わた</sup>そう、これら<sup>くにぐに</sup>の国<sup>くに</sup>々<sup>々</sup>でアモン人<sup>じん</sup>が存<sup>そんざい</sup>在<sup>ざい</sup>して<sup>こと</sup>いた事<sup>こと</sup>すら思<sup>おも</sup>い出<sup>だ</sup>される事<sup>こと</sup>が無<sup>な</sup>くなるように。

“そして私<sup>わたし</sup>はモアブ人<sup>じん</sup>に審<sup>しん</sup>判<sup>ぱん</sup>を下<sup>くだ</sup>し、彼<sup>かれ</sup>らは私<sup>わたし</sup>が主<sup>しゆ</sup>であると思<sup>おも</sup>い知<sup>し</sup>るでしょう。

“主<sup>しゆ</sup>なる神<sup>かみ</sup>は仰<sup>おほ</sup>せられる；エドム〔エドムはエサウ：現<sup>げん</sup>在<sup>ざい</sup>のトルコ〕はユダ<sup>いえ</sup>の家<sup>いえ</sup>に敵<sup>てきたい</sup>対<sup>たい</sup>、報<sup>ほう</sup>復<sup>ふく</sup>し、彼<sup>かれ</sup>らに復<sup>ふく</sup>讐<sup>しゅう</sup>を果<sup>は</sup>たす事<sup>こと</sup>で大<sup>だい</sup>罪<sup>ざい</sup>を犯<sup>おか</sup>した；

“故<sup>ゆえ</sup>に主<sup>しゆ</sup>なる神<sup>かみ</sup>は仰<sup>おほ</sup>せられる；私<sup>わたし</sup>はエドムにも手<sup>て</sup>を伸<sup>の</sup>ばし、そこ<sup>ひと</sup>から人<sup>けもの</sup>と獣<sup>けもの</sup>を消<sup>しょう</sup>滅<sup>めつ</sup>させ；テマン〔”オスマン-トルコ 帝<sup>てい</sup>国<sup>こく</sup>。”〕の<sup>な</sup>名<sup>な</sup>はテマンに由<sup>ゆ</sup>来<sup>らい</sup>し、古<sup>こ</sup>代<sup>だい</sup>トルコ<sup>おも</sup>の主<sup>しゆ</sup>な部<sup>ぶ</sup>族<sup>ぞく</sup>の<sup>ひと</sup>一<sup>ひと</sup>つが”テマン人<sup>じん</sup>”だ<sup>はじ</sup>ったの<sup>ち</sup>です〕；を<sup>ち</sup>始<sup>はじめ</sup>めとしてその地<sup>ち</sup>を荒<sup>こう</sup>廢<sup>はい</sup>させよう。そして、デダンの民<sup>たみ</sup>は敵<sup>てき</sup>の劍<sup>つるぎ</sup>によ<sup>よ</sup>って滅<sup>ほろ</sup>びるだろう。

“そして、私<sup>わたし</sup>は我<sup>わ</sup>が民<sup>たみ</sup>イスラエルの手<sup>て</sup>を介<sup>かい</sup>して、エドムへの復<sup>ふく</sup>讐<sup>しゅう</sup>を果<sup>は</sup>たすだろう。彼<sup>かれ</sup>らは私<sup>わたし</sup>の憤<sup>いきどお</sup>りと激<sup>げき</sup>怒<sup>ど</sup>に従<sup>したが</sup>って行<sup>こう</sup>動<sup>どう</sup>し、エドムの者<sup>もの</sup>達<sup>たち</sup>は私<sup>わたし</sup>の報<sup>ほう</sup>復<sup>ふく</sup>を思<sup>おも</sup>い知<sup>し</sup>ることになるだろうと、主<sup>しゆ</sup>なる神<sup>かみ</sup>は仰<sup>おほ</sup>せられる”（エゼキエル書<sup>しよ</sup>25：7-14）。

さてここで、稀<sup>まれ</sup>にしか読<sup>よ</sup>まれ、あ<sup>ひろ</sup>まり広<sup>り</sup>く理<sup>り</sup>解<sup>かい</sup>されてい<sup>しよ</sup>ないオバデヤ書<sup>しよ</sup>の予<sup>よ</sup>言<sup>げん</sup>に注<sup>ちゆう</sup>目<sup>もく</sup>して下<sup>くだ</sup>さい。それは主<sup>しゆ</sup>の<sup>ひ</sup>日<sup>ひ</sup>とキリストの再<sup>さい</sup>来<sup>らい</sup>直<sup>ちよく</sup>後<sup>ご</sup>の結<sup>けつ</sup>果<sup>か</sup>につ<sup>か</sup>いて書<sup>しよ</sup>かれた書<sup>しよ</sup>です。”オバデヤの予<sup>よ</sup>見<sup>けん</sup>。主<sup>しゆ</sup>なる神<sup>かみ</sup>はエドム〔“エサウはエドムのこと：創<sup>そう</sup>世<sup>せい</sup>記<sup>き</sup>36：19〕；につ<sup>い</sup>いて

てこう仰せられる。私達は主からお話を賜りました。使者が一人諸国に遣わされこう  
いいます、立ち上がれ、そして敵に対して戦いを挑もうではないか。

“見るがよい、私はお前を諸国の中でも特に弱小なものとし、お前は忌み嫌われる  
だろう。

“岩のはざま[“セイル”山は、エドムに関連した形で何度も言及されています]、に  
住む者よ、その居を高く構え心の内で、誰が私を地に引き摺り下ろす事など出来ようか  
と呟く者よ。お前自らの慢心が、お前を欺く事となった?

“たとえお前が鷲の如く飛翔し、星々の間に巢を架けたとしても、私はお前を引き  
摺り下ろして見せようと、主は仰せられる。

“もし盗賊がお前を訪れたり、強盗が夜中にやって来ても、(お前はなんと悲惨な  
目に遭うことか!) 彼らは必要なだけしか盗んでいかないのではないか? もし誰かがお  
前のぶどうを収穫に来たら、少しのぶどうを残していくのではないだろうか?

”だが、エサウの物資はしらみつぶしに物色されよう! その隠された財宝まで探し  
荒らされることだろう!

“お前と手を組んだ者全てが(詩篇83章を参照) お前を国の境まで追いやるだろ  
う: お前と和を結んでいた者はお前を騙し、打ち負かすだろう; お前が食を分け与えた  
ものは、お前の元に罫を仕掛け、お前はそれに全く気付かないだろう。

“主は仰せられる。私がエドムから賢者を抹消し、エサウの山からは知識そのも  
のを取り除く日がやってくるだろう?

“そして聞け、テマン[主要部族: 第一次世界大戦中にカイザーと同盟を結び、英国  
のアレンビー将軍に敗れた]”オスマン帝国”の名の由来、お前の戦士達は驚愕し、  
終いには、エサウ山の者全てが虐殺され絶えるだろう。

“お前は 弟のヤコブ[後にイスラエルと改名される] に対する暴力の為、その身は  
恥に包まれ永遠に追放される事となろう。

“その日お前は関心も見せず唯一人立っていた、よそ者が彼らの富を強奪し、異国の

ものたち <sup>もん</sup> お <sup>い</sup> 者達 <sup>もん</sup> がその門に押し入り、エルサレムをくじで分けあ <sup>わ</sup> けて合 <sup>あ</sup> っていた時、お前はあ <sup>ま</sup> たか <sup>かれ</sup> も彼らの一員 <sup>いちいん</sup> の様に振舞 <sup>ふるま</sup> っていた。[注：数世紀 <sup>すうせい</sup> もの間、トルコ <sup>あいだ</sup> は、エーゲ海 <sup>かい</sup> と黒海 <sup>こっかい</sup> に挟まれた世界 <sup>せかい</sup> で最も <sup>もつと</sup> 重要な <sup>じゅうよう</sup> ”海門 <sup>かいもん</sup> ”の一つ <sup>ひと</sup> ボスポラス海 <sup>かいきょう</sup> 峡 / ダーダネルス海 <sup>かいきょう</sup> 峡 - にまた <sup>そんざい</sup> がって存在 <sup>ゆい</sup> し、ロシア <sup>ふとうこう</sup> にとって唯一 <sup>ていきょう</sup> の不凍港 <sup>ていきょう</sup> を提供 <sup>ていきょう</sup> していました]。

“だがお前は <sup>ま</sup> え <sup>きょうだい</sup> 兄弟 <sup>つ</sup> が連れ去 <sup>さ</sup> られたあ <sup>ひ</sup> の日、それを <sup>たの</sup> 喜び <sup>ぼうかん</sup> げに傍観 <sup>ぼうかん</sup> するべき <sup>べき</sup> ではな <sup>な</sup> かった。ユダ <sup>よ</sup> の子孫 <sup>しよん</sup> の滅び <sup>ほろ</sup> の日 <sup>ひ</sup> も、これを <sup>よ</sup> るこ <sup>よ</sup> 喜ぶ <sup>よろこ</sup> べきではな <sup>な</sup> かったし、彼 <sup>かれ</sup> らの苦難 <sup>くなん</sup> の日 <sup>ひ</sup> に、声高 <sup>こえだか</sup> に驕 <sup>おご</sup> り高ぶ <sup>たか</sup> るべきではな <sup>な</sup> かった；[大患難 <sup>たいかん</sup> 時代 <sup>なんじ</sup> 中に起 <sup>おこ</sup> ると <sup>い</sup> 言 <sup>い</sup> われる、未 <sup>み</sup> 来 <sup>らい</sup> のイスラエル <sup>い</sup> の捕虜 <sup>ほりよ</sup> 化 <sup>か</sup> については、エレミヤ書 <sup>しよ</sup> 30 : 1 - 11 <sup>さんしやう</sup> を参 <sup>さん</sup> 照 <sup>しやう</sup> して下 <sup>くだ</sup> さい]。

“お前は <sup>ま</sup> え <sup>わたし</sup> 私 <sup>たみ</sup> の民 <sup>さいやく</sup> の災厄 <sup>ひ</sup> の日に、その門 <sup>もん</sup> に押し入 <sup>お</sup> 入 <sup>い</sup> るべきではな <sup>な</sup> かった。そう <sup>そう</sup> と <sup>と</sup> も、その災厄 <sup>さいやく</sup> の日 <sup>ひ</sup> に、お前は <sup>ま</sup> え <sup>かれ</sup> 彼 <sup>かれ</sup> らの苦痛 <sup>くつう</sup> を傍観 <sup>ぼうかん</sup> するべきではな <sup>な</sup> かった。ま <sup>ま</sup> して <sup>して</sup> や、そ <sup>そ</sup> の災厄 <sup>さいやく</sup> の日 <sup>ひ</sup> に、彼 <sup>かれ</sup> らの富 <sup>とみ</sup> に手 <sup>て</sup> を出 <sup>だ</sup> すべきではな <sup>な</sup> かったのだ；

“さら <sup>ま</sup> には、お前は <sup>ま</sup> え <sup>なんみん</sup> 難民 <sup>き</sup> を切 <sup>き</sup> り捨 <sup>す</sup> てるために、その逃 <sup>に</sup> げ道 <sup>みち</sup> に立 <sup>た</sup> ちはだ <sup>だ</sup> かるべきではな <sup>な</sup> かったし、その災厄 <sup>さいやく</sup> にま <sup>ま</sup> みれた <sup>と</sup> 都市 <sup>し</sup> に残 <sup>のこ</sup> った生 <sup>せい</sup> 存 <sup>ぞん</sup> 者 <sup>しや</sup> を引 <sup>ひ</sup> き渡 <sup>わた</sup> すべきではな <sup>な</sup> かったのだ。

“主 <sup>しゅ</sup> の日 <sup>ひ</sup> が全 <sup>すべ</sup> ての国 <sup>くに</sup> に訪 <sup>おと</sup> れる日 <sup>ひ</sup> に、お前は <sup>ま</sup> え <sup>みずか</sup> 自 <sup>おこ</sup> らの行 <sup>み</sup> いを <sup>う</sup> その身 <sup>ま</sup> に受 <sup>ま</sup> け、お前 <sup>むく</sup> の報 <sup>むく</sup> いは <sup>い</sup> おま <sup>い</sup> え <sup>むく</sup> 自 <sup>むく</sup> 身 <sup>むく</sup> の頭 <sup>むく</sup> 上 <sup>むく</sup> に降 <sup>むく</sup> りか <sup>むく</sup> かって <sup>むく</sup> 来 <sup>むく</sup> るだ <sup>むく</sup> ろう。

“お前 <sup>ま</sup> が <sup>わたし</sup> 私 <sup>せい</sup> の聖 <sup>やま</sup> なる山 <sup>いんしゅ</sup> で飲 <sup>た</sup> め <sup>すべ</sup> 酒 <sup>く</sup> したが <sup>もの</sup> 為 <sup>の</sup> に、全 <sup>つづ</sup> ての国 <sup>こと</sup> の者 <sup>こと</sup> 達 <sup>こと</sup> も飲 <sup>こと</sup> み続 <sup>こと</sup> ける事 <sup>こと</sup> とな <sup>こと</sup> ろう。そう <sup>そう</sup> と <sup>と</sup> も、彼 <sup>かれ</sup> らは飲 <sup>の</sup> むに <sup>の</sup> 飲 <sup>の</sup> み下 <sup>くだ</sup> すが、正 <sup>まさ</sup> に初 <sup>はじ</sup> め <sup>はじ</sup> から <sup>はじ</sup> 存 <sup>そんざい</sup> 在 <sup>そんざい</sup> して <sup>そんざい</sup> い <sup>そんざい</sup> な <sup>そんざい</sup> かった <sup>そんざい</sup> か <sup>そんざい</sup> の <sup>そんざい</sup> よう <sup>そんざい</sup> にな <sup>そんざい</sup> るだ <sup>そんざい</sup> ろう。

“だが、シオン山 <sup>ざん</sup> に救 <sup>すく</sup> いが来 <sup>く</sup> る日 <sup>ひ</sup> (なぜ <sup>きゆうせいしゅ</sup> なら、救 <sup>おとず</sup> 世 <sup>おとず</sup> 主 <sup>おとず</sup> が訪 <sup>おとず</sup> れるから <sup>おとず</sup> ！)、 そ <sup>せい</sup> こは聖 <sup>せい</sup> なる地 <sup>ち</sup> とな <sup>せい</sup> るだ <sup>せい</sup> ろう。そ <sup>せい</sup> して <sup>せい</sup> ヤコ <sup>い</sup> ブ <sup>い</sup> の家 <sup>とみ</sup> は <sup>え</sup> その富 <sup>え</sup> を得 <sup>え</sup> るだ <sup>え</sup> ろう。

“さら <sup>い</sup> に、ヤコ <sup>い</sup> ブ <sup>い</sup> の家 <sup>い</sup> は <sup>い</sup> 火 <sup>か</sup> と化 <sup>い</sup> し、ヨセ <sup>い</sup> フ <sup>い</sup> の家 <sup>い</sup> は <sup>い</sup> 炎 <sup>い</sup> その <sup>い</sup> もの <sup>い</sup> にな <sup>い</sup> る；[ヨセ <sup>い</sup> フ <sup>い</sup> は <sup>い</sup> エ <sup>い</sup> フ <sup>い</sup> ラ <sup>い</sup> イ <sup>い</sup> ム <sup>い</sup> と <sup>い</sup> マ <sup>い</sup> ナ <sup>い</sup> セ <sup>い</sup> を <sup>い</sup> 意 <sup>い</sup> 味 <sup>い</sup> し <sup>い</sup> ま <sup>い</sup> す <sup>い</sup> ！]、そ <sup>い</sup> して <sup>い</sup> エ <sup>い</sup> サ <sup>い</sup> ウ <sup>い</sup> の家 <sup>い</sup> は <sup>い</sup> 刈 <sup>い</sup> り <sup>い</sup> 株 <sup>い</sup> とな <sup>い</sup> り、彼 <sup>い</sup> ら <sup>い</sup> は <sup>い</sup> エ <sup>い</sup> サ <sup>い</sup> ウ <sup>い</sup> を <sup>い</sup> 燃 <sup>い</sup> え <sup>い</sup> 尽 <sup>い</sup> く <sup>い</sup> す <sup>い</sup> だ <sup>い</sup> ろう。こ <sup>い</sup> う <sup>い</sup> して <sup>い</sup> エ <sup>い</sup> サ <sup>い</sup> ウ <sup>い</sup> の家 <sup>い</sup> に <sup>い</sup> 生 <sup>い</sup> 存 <sup>い</sup> 者 <sup>い</sup> は <sup>い</sup> い <sup>い</sup> な <sup>い</sup> く <sup>い</sup> な <sup>い</sup> る <sup>い</sup> と、主 <sup>い</sup> は <sup>い</sup> 仰 <sup>い</sup> せ <sup>い</sup> ら <sup>い</sup> れ <sup>い</sup> た <sup>い</sup> か <sup>い</sup> ら <sup>い</sup> で <sup>い</sup> ある。

“そ <sup>い</sup> して <sup>い</sup> 南 <sup>い</sup> ( <sup>い</sup> ネ <sup>い</sup> ゲ <sup>い</sup> ヴ <sup>い</sup> ) の <sup>い</sup> 住 <sup>い</sup> 人 <sup>い</sup> は <sup>い</sup> エ <sup>い</sup> サ <sup>い</sup> ウ <sup>い</sup> の山 <sup>い</sup> を <sup>い</sup> 捕 <sup>い</sup> ら <sup>い</sup> え、平 <sup>い</sup> 野 <sup>い</sup> ( <sup>い</sup> シ <sup>い</sup> ヲ <sup>い</sup> ヲ <sup>い</sup> ヲ <sup>い</sup> ) の <sup>い</sup> 住 <sup>い</sup> 人 <sup>い</sup> は <sup>い</sup> ペ <sup>い</sup> リ <sup>い</sup> シ <sup>い</sup> テ <sup>い</sup> の平 <sup>い</sup> 原 <sup>い</sup> を <sup>い</sup> 占 <sup>い</sup> 領 <sup>い</sup> す。ま <sup>い</sup> た <sup>い</sup> 彼 <sup>い</sup> ら <sup>い</sup> は <sup>い</sup> エ <sup>い</sup> フ <sup>い</sup> ラ <sup>い</sup> イ <sup>い</sup> ム <sup>い</sup> 領 <sup>い</sup> 地 <sup>い</sup> と <sup>い</sup> サ <sup>い</sup> マ <sup>い</sup> リ <sup>い</sup> ア <sup>い</sup> 領 <sup>い</sup> 地 <sup>い</sup> を

え、ベンジャミンはギレアドを<sup>かくとく</sup>獲得<sup>こと</sup>する事となる。

“イスラエルの子孫<sup>しそん</sup>の捕虜<sup>ほりよ</sup>の<sup>いちだん</sup>一団は、ザレパテ<sup>いた</sup>に<sup>じん</sup>到るまでの<sup>とち</sup>カナン人の<sup>え</sup>土地を得、セファラド<sup>ほりよたち</sup>にいるエルサレムの<sup>みなみ</sup>捕虜達は、南（ネゲブ）の<sup>とし</sup>都市と<sup>まち</sup>町を<sup>か</sup>勝ち取る<sup>と</sup>だろう。

“こうして救世主<sup>きゆうせいしゅたち</sup>達<sup>ふくすうけい</sup>[複数形です！キリストが後半<sup>こうはん</sup>の第二期<sup>だいにき</sup>(大<sup>だいかん</sup>艱難<sup>なんじだいご</sup>時代<sup>しちねん</sup>後<sup>ご</sup>の七年<sup>しちねん</sup>奉仕<sup>ほうし</sup>を開始<sup>かいし</sup>する時<sup>とき</sup>、復活<sup>ふっかつ</sup>した<sup>せいじんたち</sup>聖人<sup>かれ</sup>達が<sup>くわ</sup>彼<sup>か</sup>に加<sup>やま</sup>わる<sup>き</sup>のです！)は、エサウの山<sup>やま</sup>を裁<sup>さ</sup>く<sup>ぼため</sup>為<sup>ため</sup>にシオン山<sup>さん</sup>へ登<sup>のぼ</sup>られる<sup>おうこく</sup>だろう:そして王国<sup>しゅ</sup>は主<sup>もの</sup>の物<sup>しよ</sup>となる” (オバデヤ書<sup>しよ</sup>1-21)

こうした中東<sup>ちゆうとう</sup>に関する<sup>かん</sup>多くの<sup>おお</sup>予言<sup>よげん</sup>から<sup>はん</sup>判断<sup>はん</sup>すれば、これは<sup>かくしん</sup>確信<sup>で</sup>出来る<sup>こと</sup>事<sup>こと</sup>です！アブラハム<sup>ふちゆうぎ</sup>の不忠儀<sup>しそん</sup>な子孫<sup>きやうだいたち</sup>やイサク<sup>ぼつ</sup>の兄弟<sup>べいこく</sup>達<sup>えいこく</sup>を<sup>やくわり</sup>罰<sup>ばつ</sup>するのは、米国<sup>べいこく</sup>や英国<sup>えいこく</sup>の役割<sup>やくわり</sup>ではないのです！全能<sup>ぜんのう</sup>の神<sup>かみ</sup>が、個人<sup>こじん</sup>や国<sup>くに</sup>の罪<sup>つみ</sup>に<sup>おう</sup>応<sup>おう</sup>じて、それぞれの<sup>くに</sup>国<sup>さば</sup>を<sup>さば</sup>裁<sup>さ</sup>く<sup>さば</sup>ことでしょ！

たいかんなんじだい しゅ おお ひ お さいご げきつう たたか すべ くに  
大<sup>たい</sup>患難<sup>かん</sup>時代<sup>じだい</sup>と主<sup>しゅ</sup>の大<sup>おお</sup>なる日<sup>ひ</sup>に起<sup>お</sup>こる<sup>さいご</sup>最後<sup>げきつう</sup>の<sup>たたか</sup>激痛<sup>すべ</sup>は、イスラエル<sup>いすらえ</sup>と戦<sup>せん</sup>った全<sup>ぜん</sup>ての<sup>くに</sup>国<sup>こ</sup>に対する<sup>たい</sup>神<sup>かみ</sup>の<sup>さば</sup>裁<sup>さ</sup>きによる<sup>ただ</sup>もの<sup>ただ</sup>です！但<sup>ただ</sup>し、これは<sup>げんざい</sup>パレスチナ<sup>げんざい</sup>にある<sup>げんざい</sup>現在<sup>げんざい</sup>の「イスラエル」に<sup>かぎ</sup>限<sup>かぎ</sup>られた<sup>かぎ</sup>ものでは<sup>かぎ</sup>ありませ<sup>かぎ</sup>ん！それは<sup>かぎ</sup>特に、<sup>かぎ</sup>アメリ<sup>かぎ</sup>カ合<sup>かぎ</sup>衆<sup>かぎ</sup>国<sup>かぎ</sup>と<sup>かぎ</sup>英国<sup>かぎ</sup>の<sup>かぎ</sup>事<sup>かぎ</sup>でもあ<sup>かぎ</sup>る<sup>かぎ</sup>のです！私<sup>わたし</sup>の<sup>ちよしよ</sup>著<sup>ちよしよ</sup>書<sup>しよ</sup>『Europe and America in Prophecy (予言<sup>よげん</sup>における<sup>よげん</sup>ヨーロッパとアメリ<sup>よげん</sup>カ)』を<sup>よ</sup>まだ<sup>よ</sup>読<sup>よ</sup>まれて<sup>よ</sup>いな<sup>よ</sup>い<sup>よ</sup>方<sup>よ</sup>は、<sup>かた</sup>無<sup>む</sup>料<sup>りやう</sup>コ<sup>む</sup>ピ<sup>りやう</sup>ーを<sup>むりやう</sup>1- (903) 561-7070にて<sup>むりやう</sup>ご<sup>むりやう</sup>注<sup>むりやう</sup>文<sup>むりやう</sup>下<sup>むりやう</sup>さい。また、<sup>かた</sup>当<sup>たう</sup>方<sup>ほう</sup>の<sup>たうほう</sup>ホ<sup>たうほう</sup>ム<sup>たうほう</sup>ペ<sup>たうほう</sup>ー<sup>たうほう</sup>ジ「www.garnertedarmstrong.org」で<sup>たうほう</sup>お<sup>たうほう</sup>読<sup>たうほう</sup>み<sup>たうほう</sup>頂<sup>たうほう</sup>く<sup>たうほう</sup>か、<sup>たうほう</sup>ダ<sup>たうほう</sup>ウ<sup>たうほう</sup>ン<sup>たうほう</sup>ロ<sup>たうほう</sup>ー<sup>たうほう</sup>ド<sup>たうほう</sup>す<sup>たうほう</sup>る<sup>たうほう</sup>事<sup>たうほう</sup>も<sup>たうほう</sup>可<sup>たうほう</sup>能<sup>たうほう</sup>です。尚<sup>たうほう</sup>、<sup>たうほう</sup>「イスラ<sup>たうほう</sup>ム」の<sup>たうほう</sup>起<sup>たうほう</sup>源<sup>たうほう</sup>を<sup>たうほう</sup>理<sup>たうほう</sup>解<sup>たうほう</sup>し、<sup>たうほう</sup>モ<sup>たうほう</sup>ハ<sup>たうほう</sup>メ<sup>たうほう</sup>ッ<sup>たうほう</sup>ド<sup>たうほう</sup>の<sup>たうほう</sup>生<sup>たうほう</sup>涯<sup>たうほう</sup>について<sup>たうほう</sup>お<sup>たうほう</sup>読<sup>たうほう</sup>み<sup>たうほう</sup>に<sup>たうほう</sup>な<sup>たうほう</sup>り<sup>たうほう</sup>たい<sup>たうほう</sup>方<sup>たうほう</sup>は、<sup>たうほう</sup>私<sup>わたし</sup>の<sup>たうほう</sup>小<sup>たうほう</sup>冊<sup>たうほう</sup>子<sup>たうほう</sup>『Mideast Strife, Will It Lead To Armageddon? (中東<sup>ちゆうとう</sup>紛<sup>ちゆうとう</sup>争<sup>ふんそう</sup>: それは<sup>つな</sup>アル<sup>つな</sup>マ<sup>つな</sup>ゲ<sup>つな</sup>ド<sup>つな</sup>ン<sup>つな</sup>に<sup>つな</sup>繋<sup>つな</sup>がる<sup>つな</sup>の<sup>つな</sup>だ<sup>つな</sup>ら<sup>つな</sup>う<sup>つな</sup>か<sup>つな</sup>。)』を<sup>つな</sup>ど<sup>つな</sup>う<sup>つな</sup>ぞ<sup>つな</sup>ご<sup>つな</sup>覧<sup>つな</sup>下<sup>つな</sup>さい。